

[復刻版] 昭和天皇の御巡幸 鈴木正男著発刊に思う (二)

理事 袴田 忠夫

墨染の衣を着た原爆孤児のおつむを撫で給う

山口県の御巡幸を終えられた陛下は 12 月 5 日午後、県境を超えられて広島県に入れ、先ず国立大竹病院を見舞われ、当日の御泊所である宮島へ向かわれた。宮島口にお着きになった陛下は真白にお化粧した連絡船「七浦丸」に御乗船、折から夕日を浴びて天皇旗が前部マストにさっとはためくや、熱狂した大群衆は棧橋や波打ち際に殺到した。陛下は後甲板に立たれ、万歳の嵐に何度も何度も御手を振られた。やがて御召船は厳島に御到着、岩惣旅館に入られた。12 月 6 日は御休養日であった。午前中は付近の山や溪谷を御散策になり、植物などを御調べになったが、記者やカメラマンが付きまとして、御自由に御歩きになれなかった。午後は水上警察のモーターボートで島を一周された。弥山を中心とするこの神の島も、戦時中の乱伐ですっかり荒れてしまっていた。御泊所へ戻られ、午後 4 時より知事の県政一般の奏上を受けられ、続いて原爆被災者の医療についての御進講をはじめとし、四名の者から御進講を受けられた。12 月 7 日、この日は原爆の地広島へお入りになる日である。宮島口から御車で国道を広島に向かわれ、途中、県水産試験場で当地の名産であるカキの研究を御覧になった。広島市の入口に近いところに、原爆孤児八十四名が列んでお迎えしていた。これは広島戦災児育成所に収容されていた子供たちで、亡き父母を供養するために仏門に入り、頭を剃って墨染の衣を着ている児も五、六人いた。陛下は御車を止められ、そのそばへ玉歩を運ばれ、お優しく御慰めの御言葉を賜った。そして、そこにいた原爆で頭のハゲた一人の男の子の頭をかかえこむようにして御目頭をしばし押さえられた。周囲の群衆も皆静まり返り、すすり泣いた。まったく畏き場面であった。

御製 ああ広島平和の鐘も鳴りはじめたちなほる見えてうれしかりけり

午前 10 時 20 分、原爆の爆心地「相生橋」を御通過になり、元護国神社跡の広島市民歓迎場に臨まれた。この状況を「山陽新聞」は次の如く伝えている。

く平和の鐘がカーンカーンと静かに人の心を揺り動かしてなりひびく中をあづき色の御召車はスピードを落として相生橋の上にさしかかれば、期せずして万歳の声が爆心地にともよし、本川の清流に響いた。この時に御車中の陛下はさっと唇を引き締め、平和塔の方に心持ち顔を向けられて市民に会釈されながら市民歓迎場にお着きになった。御座席の上に濃いねずみいろのオーバー、茶色がかった紺の帽子の陛下を認めるや、広島鉄道局のバンド吹奏に七万の歓迎者は君が代を合唱、期せずして「万歳」が場内を圧する。浜井市長から、「願わくば特殊な戦災をこうむりました広島市民に深い御心をお寄せ下さいますことを謹んでお願いします。」と言上の辞を述べるや陛下は深くうなずかれ、右側のオーバーのポケットから小さな紙片を出されてマイクに向かい朗々たるお声で、「このたびは皆のもの

熱心な歓迎を受けてうれしく思う。本日は親しく市内の災害地を視察するが、広島市は特別な災害を受けて誠に気の毒に思う。広島市民は復興に努力し、世界の平和に貢献せねばならぬ。」と激励になり、慈愛深く市民の群を眺められた。思いもよらぬ陛下の御言葉を聞いた市民はその瞬間、十数万のいけにえを捧げて砂のように乾いた魂の中に新しい命をよみがえられさせ、池田市議長の発声で感激にぬれた万歳を絶叫、真っ赤に焼けただれた土、黒こげの立ち木、飴のように曲がった鉄骨などが死骸をさらすアトム街に、陛下の御心はおおらかに愛と平和の希望を植えつけられたのである。この中国地方御巡幸に占領軍の御目付け役として同行していたGHQ民政局のケントは、ただただ驚くばかりであった。天皇を怨むものなど一人もいない。皆どこでも、民衆は歓喜して天皇を迎え、熱狂して万歳を唱え、感涙を流す。特に天皇を怨んでおるのではないかと思っていた広島では、何と七万人という空前の人達が集まったのだ。天皇制廃止論者のケントは恐ろしくさえた。「このまま御巡幸を続けていたらどうなるか。天皇制はますます確固不動になる。何としても御巡幸を止めさせねばならぬ」と考えたであろうことは想像に難くない。その上、この広島でケントを激怒させる事件が起きた。「原爆の地に天皇が立った。これはニュースだ」と外人記者が興奮して「天皇の御声明をいただきたい」と申し出たが、宮内官は陛下に申し上げようともせず「外務省に交渉してくれ」と突っぱねた。記者らは「アメリカでは大統領でも記者には話をするものだ」と詰め寄るが、話にならない。ケントは地団駄を踏んで怒ったが、どうしようもなかった。陛下は奏迎場より市内の授産場、小中学校を御視察になり、市役所に御到着、屋上の展望台に立たれた。広島市長は前方一キロのところにある爆心地を指さし、この爆心地を中心に半径二キロが一瞬にして死の町となった当時の模様を詳しく御説明した。市役所も大群衆で埋まっていた。陛下は屋上より御手を振られる。嵐のように万歳の声が渦巻いた。かくて陛下は広島より呉へ廻られた。ここも大変な大群衆であった。市役所の屋上から市内を御展望になられたが、かつての軍港呉の姿はどこにもなかった。その後、御泊所である三原市の東洋繊維株式会社浮城分室に入られた。この三原には帝国人絹、東洋繊維、三菱重工業の三大工場があり、そのすべてを御視察になり、工員を激励された。この工場のうち三菱重工業の労組は共産分子の勢力が強く、御巡幸反対の動きがあり、陛下に対し失礼なことが起こるかもしれないと関係者は心配し、緊張していたが、何事もなかった。陛下は産業再建の重要性を説かれ、現在の苦境に同情され、一段の努力を望まれる御言葉を何度も繰り返され、組合員はその御言葉に元気一杯大きな声でお答えし、万歳を叫ぶことはどこも同じであった。

新聞論調一夜にして激変、奏迎場が歓迎場に

昭和22年12月8日、御召列車は広島県から岡山県に入り、午後4時半、倉敷駅に御着きになった。駅頭を埋めた万余の群衆が熱狂して万歳を連呼する中を御車は駅前の大歓迎門から栄町、浜田町、旭町、本町を通って前神町に御着きになったが、御泊所付近でも熱狂した群衆は万歳、万歳を絶叫、空前の一大歓迎絵巻を繰り広げた。このため、いったん

御車を下り御泊所に入りかけられた陛下は、玄関前でぐるりと振り返られて付近を埋め尽くした群衆に帽子を振ってお応えになり、午後4時35分、岡山県の第一夜を過ごされる有隣荘にお入りになった。12月10日は岡山市内を巡られ、次いで県南東部を巡幸されて和気町まで行かれ、それから列車で倉敷まで引き返されて、倉敷歓迎場で市民の奏迎を受けられて再度有隣荘御泊。昭和22年11月27日から始まった中国地方御巡幸の最終日となった12月11日は、倉敷より美作地方まで北上され、津山市で奏迎を受けられ、最後に山奥の柳原鉦山という硫化鉄の鉦山の坑道にまで入られ、姫新線の林野駅に出られ、そこから御召列車で一路御帰京の途に就かれる御予定であった。陛下はこの御予定を滞りなく終えられたが、美作地方を巡られた3日目の11日は前夜来の寒風は吹雪となり、御順路の沿線、沿道は真っ白となり、奏迎を受けられる陛下も大変であらせられた。

ところで、この岡山県三日間の御巡幸でも至る所で感激的場面はあったと思われるが、新聞はそれを何も伝えていない。報道はごく表面的で事務的である。そのことは次の記事を読み、他を推察居て頂きたい。〈〔岡山歓迎場〕人間天皇に接せんものと、御着きをお待ち申し上げる児童、女学生、一般市民の群で一杯、静肅の裡にも何かしら明るい希望と憧れが満ちている。午後3時40分ごろ、定刻よりやや遅れて陛下の御車が眼にとまったとたん期せずして潮のような万歳の声が起こった。居並ぶ学生団の唱和する「君が代」が流れていく。県会議長の発声で万歳を三唱、これに応えられて何度も何度も右手の帽子を御振りになる陛下であった。〔倉敷歓迎場〕和気駅から御発ちになった陛下は途中、沿道の歓呼に応えられながら3時51分倉敷駅御着。急遽日程を変更してしつらえられた東校の市民歓迎場に臨まれ、高橋市議会議長の発声する万歳を御受けになって、4時、大原美術館御到着。〔高梁町歓迎場〕高梁町ではわずか三分間ではあったが、駅前歓迎場にお成りになり町民の心からなる歓迎におこたえになった。〉（山陽新聞）

「奏迎場」が「歓迎場」となったことは見出しの如くであるが、岡山市も倉敷市も高梁町も、どのくらいの人が集まったか人数の報道がない。岡山市はこの山陽新聞本社の所在地であることから考えると全く考えられない書き方で、広島市の報道と見比べると、倉敷市に至っては、その見出しもなく、大原美術館へ行かれる御道筋の記事にしか過ぎない。御巡幸が始まってからこの方、どこの奏迎場でも陛下が会場へ入られる御通路の最前列に並んで御迎えするのが遺族、戦災者、引揚者、傷痍者である。それが陛下の御希望であり、陛下はそれらの方々に先ず第一に御慰めと御激励の御言葉を必ずかけられる。もちろん岡山県の場合も例外ではなかったが、新聞にはそのことは一行も書かれていない。どの会場でも「君が代」の大合唱となり、会場は熱狂した民衆の叫ぶ万歳の嵐となる。その事も記事にはない。それはなぜか。民政局からの監視役のケントが広島市歓迎場で激昂したことは前述したが、広島県では更に彼を激昂させる事件があった。それは、ある工場で陛下が別室で社長以下の個人拝謁の際、その部屋にケントが入ろうとして側近が阻止、押し問答

となったことである。頭にきたケントは新聞記事に大圧力を加えた。当時の新聞は厳重な占領軍の検閲下にあったので、これはいとも簡単であった。当時、岡山県の軍政部長はスプリンガー中佐と云った。この軍政部長は前もって県下の御巡幸地を全部巡視し、また陛下がお成りになる 30 分前には、そこをさらに廻るといふ念の入れ方であった。従来陛下をお迎えする言葉はすべて「奏迎」であったが、広島県からはこれが「歓迎」に変わった。これは日本人では到底考えられないことである。占領軍の指示であることは明瞭である。さて、陛下は美作地方の御巡幸を終えられ、12 月 11 日午後 3 時 12 分、姫新線林野駅を御出発になり、還幸の途につかれ、御召列車は姫路、大阪を経て一路東京へ向かって走り続けた。しかし、ここで占領軍との間に重大な事件が起こっていた。それは 11 日、林野駅を出発して間もなく御召列車は兵庫県に入ったが、兵庫県に入った途端、沿道の田圃に並んでいた約六十人の小学生たちがパッと日の丸の旗を振った。沿線の農家の屋根や窓に日の丸が掲げられていた。そして御通過する列車に向かって沿線の人々が日の丸の旗を振っていた。駅ではプラットホームに生徒たちが列んで日の丸の旗を振った。「これは指令違反だ」血相を変えたケントは加藤進宮内府次長（松平慶民長官は病気で供奉していなかった）を呼びつけ、結問した。次長の列車座席からケントのところへ行くには陛下の前を通らねばならぬので、次長は停車駅ごとにホームを走ってケントに会った。話し合いはつかず、東京に帰って「明日午後 2 時、この事件についての完全な報告書を以って総司令部民政局に出頭せよ」ということになった。加藤次長は列車の中で、ほとんど寝ずにこのことの次第を書き上げた。理由は「兵庫県は御巡幸の道筋に入っていないこと。宮内府には地方自治体に指令する権限はない」という完ぺきなものであったが、ケントは「けしからぬ、軍事裁判にかけて沖縄へ送ってやる」とまで息まいた。この「日の丸」事件は、御巡幸を中止させようとする民政局の良い口実となった。全国どこへ行っても熱狂的に迎えられる天皇、その天皇の御言葉に感涙する国民、天皇にお供する宮内官や知事等以下の大行列、これはまるで凱旋將軍の大パレードではないか、と彼等は見た。そして、これは天皇の權威の復権と確認であると見た。民政局は、これ等の事実を一つ一つ挙げて御巡幸の中止を打ち出した。

秘策 宮内府幹部の更迭

G S（民政局）は御巡幸中止の肚を固めたが、そのことはおくびにも出さなかった。天皇を迎えて全国民が熱狂して慕い寄るのを見ている。中止が占領軍の命令であることが判れば、その怨みは占領軍にはねかえって来ること明々白々である。どんなことが起こるか、彼等は十分承知していた。そこで彼等が打った手は巧妙であり、辛辣であった。中国地方巡幸が終わった昭和 22 年 12 月 12 日の一週間後、G S は政府に対し宮内府の機構の改革と幹部の更迭を指示した。この申し入れに対し片山内閣は、翌 23 年 2 月 3 日の閣議でこのことを了承し実行することを決定した。当時、宮内府の首脳と見られていたのは、宮内大臣から宮内府長官になった松平慶民と侍従長の大金益次郎、宮内府次長の加藤進の三氏であった。松平長官は病気がちで中国御巡幸に従奏出来ず、23 年 1 月、片山哲首相のもとに辞

表を提出していた。片山内閣は 2 月に退陣、芦田内閣となったので、この問題の処理は芦田内閣の課題となった。既に辞表を出している松平長官は問題はないが、陛下の御信任の厚い大金侍従長を更迭することは難事である。特に大金侍従長は G II（作戦情報担当）に太いパイプを持ち、マッカーサーにも通じている。このパイプを通じて、陛下が大金侍従長の更迭に反対であることがマッカーサーに伝われば大金侍従長は解任できない。ここで G S と芦田均首相は秘策を練った。まず、マッカーサーに根回しを行うことである。

秦郁彦著「裕仁天皇五つの決断」によれば、3 月中旬、芦田首相兼外相は、新任挨拶を兼ねてマッカーサーに書簡を送り、その中で、〈最近私の注意をひいたことですが、宮内府の一部の幹部が天皇の意志に反する行動をとっているとの広い批判があります。我が国の民主化への動きに従って、この情勢を早急に是正するように必要な措置を取るつもりであります。最近天皇に拝謁しましたところ、陛下がこの問題について同じ意見を表明されましたことを付言したいと思います〉と述べている。何とそらぞらしい嘘ではないか、陛下が幹部の更迭に同意されたなどよくもいえたものである。この時点で芦田は、陛下の御意志でもないことを陛下の御意志であるかのごとく偽り、陛下とマッカーサー元帥を欺いたのである。流石にこのことは、後日の回想記で、〈私が政府にあった時、もっとも心を痛めたのは陛下の御退位の問題、宮内府の近代化などのことであった。しかしこれらについては、まだ語る時期にはきていない〉（昭和 30 年 8 月 2 日付「毎日新聞」芦田均「歴代首相回想記」）と逃げているが、陛下の御心について嘘の書簡を送り、マッカーサーを騙したとは書けなかったのが真相である。芦田という人物は大体このような人物であった。

不忠不逞の臣、芦田均

三首脳の一人、加藤進次長は硬骨漢であった。長官が辞めるならば、次長も当然やめるべきだとして三月に芦田のもとに辞表を出した。問題は侍従長である。芦田は松平長官の後任に銀行畑出身の田島道治を起用した。長官には“田島”の報が伝わると、石渡元宮内相などは「エッと・・・」と絶句した。それほどに思いもかけぬ人の起用であった。田島の希望で侍従長は、外交官出身で当時学習院の次長をしていた三谷隆信を起用することとなった。二人ともそれまではまったく宮中とは関係ない人で、ともに一高・東大の出身で、学生時代から内村鑑三・新渡戸稲造に師事していた。三谷は矢内原忠雄とは親友で、毎朝二時間はギリシャ語でバイブルを読むと言う人であった。芦田首相のこの人事の内奏を聞かれて、陛下は驚かれた。「なぜ一度に二人もの側近を替えねばならないのか。大金のような忠誠な者をどうしてやめさせねばならぬのか・・・」芦田の内奏に、宮内府長官はやむを得ないにしても、なぜ侍従長の大金まで替えねばならないのか、陛下は御納得にならなかった。大金侍従長もやめる気はなかった。しかし、かねてから宮内府に対して批判的であった外務省筋から G S の意向を体したと思われる大金批判の声があがった。陛下の御意向よりも G H Q 民政局の意向を先行させる芦田首相の肝も決まっていた。大金もこの情勢を見て「天子様と総理がうまくいなくなるとは大変だ。俺さえやめればすべてが収まる」と

決心を固める。これを伝え聞いたGSと対立するGⅡの高官は、ある朝早く侍従長官舎へジープを乗りつけ「やる気があるならば力になる」と申し出て来たが、大金はこれをことわった。そして遂に芦田首相のもとに辞表を出した。陛下は大金侍従長の更迭には御不満であった。陛下には御苦悩に直面されると独り言を仰せになりながら御自分の部屋の中をコツコツと歩き回られる御癖があった。戦前、戦中しばしばその御癖を見て来た侍従たちは、その後心中をお察しして、御痛ましく、陛下の御靴の音に我が耳をふさぎたくなる思いをしたと述懐しているが、この時も、その御癖が出た。侍従次長鈴木一は、〈御信任の厚かった前侍従長に対して惜別の情につまされておられたのかもしれない。あるいはもっと深いところにお悩みがあったのであろう。何か大きな声で独り言を仰せられているのを初めてうかがって、同席の侍従に尋ねてみると、かつての戦時中の独り言の話聞かせてくれたのである〉(岸田英夫著「侍従長の昭和史」)陛下の御心中はいかばかりであらせられたか、拝察するだに畏い限りである。陛下には御心中を吐露すべき相手はいない。壁に向かって大きな声で独り言を仰せられる以外にはなかったのである。陛下は全く孤独であらせられた。この人事には元内大臣牧野伸顕も「ホイットニー(民政局長)のごとき田舎弁護士のいうことに屈服するとは何事か」と怒ったが、時の流れを止めることは出来なかった。6月に入り辞表は正式に受理され、6月6日、新長官に田島道治氏、新侍従長に三谷隆信氏と発令された。この時、同時に辞める予定であった加藤進次長の辞表は保留された。それは、容易に後任が見つからなかったためであった。やがて林敬三氏が後任に決まり、8月に加藤次長も宮中を去った。

御巡幸の中断

以上の経緯で明らかな如く、昭和23年の1月に松平長官が辞意を表明し、加藤次長が3月には長官に準じて辞表を提出し、8月には宮中を去ったので、御巡幸どころではなくなった。特に加藤次長は事実上の御巡幸の最高責任者であったので、御巡幸は中断せざるを得ないのであった。この23年は先ず九州への御巡幸の予定が1月に立てられていて、次は四国ということであったが、それらはことごとく中止となった。ここに於て、GHQ民政局の御巡幸を中止させようとする意図はその目的を達したことになるのである。

九州御巡幸が延期となり、いつ実施されるかわからないと伝えられるや、九州全県から御巡幸を願う嘆願書が宮内府に次から次へと出された。しかし、田島長官は冷淡で容易に腰を上げようとはしなかった。そこへ突如として起こったのが御退位問題であった。この問題を記述するにはその前に、東京裁判で陛下に対していかなることがあったかを知らなければならない。

陛下と東京裁判

昭和22年5月3日、新憲法の発布により、天皇及びそれにまつわる皇室制度は保証されたが、その前年の5月3日に開廷した極東国際軍事裁判(東京裁判)では天皇を戦犯とし

て起訴すべしと、豪州、ソ連、中国、フィリピン、ニュージーランドの五カ国が主張したが、アメリカ、イギリス以下六カ国の反対によってかろうじて不起訴と決定した。ここで附言したいのは中国の態度である。蒋介石総統は昭和18年12月、米大統領ルーズベルト、英首相チャーチルとのカイロ会談に於て対日戦終了後の戦後処理をいかにすべきか話し合った。その時、天皇制については存続の意見を述べたが、東京裁判においては、中国はソ連と共に最後まで天皇有罪論を主張し、陛下を戦犯として起訴すべしと迫った事実を我々は忘れてはならない。アメリカは当初から占領政策遂行に天皇を利用する肚であったから、陛下の起訴には反対であった。それ故、首席検事キーナン（米国）は最初から強引に天皇不起訴を明言したが、裁判長ウエップ（豪州）は何とかして陛下を証人として法廷に引き出そうとし、まったく危ない場面が三回あった。最初は、平沼騏一郎元首相の証人に立った岡田啓介元首相に対する反対尋問の時である。この時はキーナンが強引に押し切ったが、不満が残った。次は、木戸幸一元内大臣の訊問の時である。木戸の不用意な発言によって、それでは天皇を証人として出廷させようという要求をソ連や中国が出そうと動き出すおそれが生じた。この要求が出された場合、これを受け入れるか、却下するかはウエップ裁判長の権限である。ウエップは必ずこれを採択する。あわてたキーナンは一時帰国した。その一週間後の22年11月10日にウエップ裁判長が急遽帰国し、12月15日に戻ってきた。ウエップの留守中はアメリカ代表のクレマー判事が就任し、この間に天皇召喚問題は立ち消えになった。このきわどい時期に於けるウエップの一時帰国は、キーナンの進言によってアメリカ政府が豪州政府に働きかけてやらせたのだ、というのが専門家たちの一致した見解である。最後に緊迫した場面は、22年の大晦日12月31日、東條英機元首相に対する反対尋問の時に起こった。正しくこれは東條大将の思わざる失言であったが、「日本の高官はすべて天皇の意志通りに動く」との意味の発言をした。これは裏を返せば、臣下に責任はなく、全ての責任は天皇陛下にあるということになる。今までの東京裁判の審議などすべて吹っ飛んでしまう大失言である。キーナンは仰天した。この日の深夜から元旦の午前4時までかかって対策を協議し、次いで宮内府式部長官松平康昌氏を呼び出し、午後10時までかかって非常策を練った結果、松平が巣鴨プリズンで木戸に面会して事情を伝え、獄中で木戸からこれを東條に伝え、その東條をキーナンが法廷で訊問し、前証言をひっくりかえして全面否定し、責任は臣下に在り、天皇にはない旨を明言させるということにした。この事態を知らされ驚いた東條大将は1月6日、法廷に於てこのことを明確に証言した。以上のように、何度も危うい橋を渡って東京裁判は進行したが、アメリカ側が必死になって陛下の出廷を止めたのは次のキーナンの言によって明らかである。くマ元帥が余に語ったところによれば、もし天皇が証人として出廷させられたならば、おそらく、我々が証拠によって見出した彼（天皇）に有利な事実をすべて無視し、日本政府の行った行動について、自ら全責任を引き受けられるにちがいない。即ち証拠によって天皇は、立憲国の元首であり、憲法上または職責上必ず側近者の補佐に基づいて言動しなければならなかったことが証明されているが、それにもかかわらず、天皇がもし出廷されたら、このようなことを自

己弁解為さらず、臣下に責任はない。すべては自分の責任であると証言されるにちがいない) (田中正明著「東京裁判とは何か」) 陛下が終戦直後の9月27日、最初にマッカーサーと御会見なされた時の、陛下の無私無所有の神の御姿を、私どもはここに再び仰ぎ感涙する。この時のマッカーサーとの御会見については、冒頭で記した日本郷友連盟の「国民の物語としての日本の歴史」において、次のように記述した。

〈日本敗戦直後の昭和20年9月27日、昭和天皇が敗戦国の代表として、戦勝国のマッカーサー元帥を訪ねたとき、天皇は長時間待たされた挙句、やっと現れたマッカーサーは、当初、足を組みながら、天皇に対応しました。マッカーサーは天皇が命乞いに来ると思っていたのです。ところが、天皇は命乞いどころか、戦争の開戦から終戦に至る一切の責任は自分にあり、自分の身は、連合国の判断にゆだねると述べ、一言の弁解もしませんでした。そして、さらに天皇は、「罪なき8000万の国民が、住むに家なく、着るに衣なく、食べるに食なき姿において、まさに深憂に堪えないものがあります。温かき閣下のご高配を賜りますように」と願われたのです。マッカーサーは天皇の一切の私心無き言葉に感動し、帰りには玄関まで見送りました。マッカーサーにとって、最大の好意の表れでした。後にマッカーサー回顧録で、「私は、昭和天皇と接した瞬間、電気が体を通り抜けるように私の前にいる天皇が、日本の最高の紳士であると感じ取った。」と、述べているのであります。〉

御退位問題

以上の如く、東京裁判におけるソ連、中国、豪州等の執拗な陛下に対する戦争責任追及も、昭和23年1月6日の東條大将の証言によって、天皇の免責は確定した。一方、新憲法で「行為は、世襲のものであって」(第二条)、その継承は新皇室典範に「天皇が崩じた時は、皇嗣が、直ちに即位する」(第四条)と明確に定められているので、今更、陛下の御退位問題が浮かび上がり、天下の耳目を動揺させる大問題になるなどとは誰も予想していなかったが、このことが松平慶民宮内府長官、大益次郎侍従長が辞任する直前に突如として起こったのであった。事の起こりは「週刊朝日」の昭和21年5月16日号の座談会記事に、三淵忠彦最高裁初代長官が「僕はネ、終戦当時、陛下はなぜ自らを責められる詔勅をお出しにならなかったかということ、非常に遺憾に思う」と述べたのが発端であった。5月26日、先ずニューヨーク・タイムズが「日本よりの報道によれば、最高裁長官が天皇を非難してその責任を論じた」と伝え、メルボルン放送、ロイター、INS両通信社がこれを世界に転電した。その中には天皇退位の憶測も入り混じっていた。驚いた三淵長官は「まったくの誤伝である」と否定したが、もう遅かった。5月29日の朝日新聞が「天皇退位説・外電報道」の見出しのもとにロンドン発ロイター電を紹介し「8月15日を期して退位の噂がある」と伝え、松本治一郎参院副議長の天皇制廃止論も併せて紹介した。6月12日には中国中央通信社東京支局長の同様な内容の報道を各紙が伝えたが、この報道には「教養の

高い日本人たちは、退位によって天皇制にまつわる戦争責任の跡をぬぐい去ることができるとし、一致して退位に賛成している」との解説があった。これを裏付けるかの如く、翌13日の朝日新聞に東大総長南原繁談として「天皇退位はあくまで自発的であるべく、また道義上の問題である」と御退位賛成論が報じられた。国内のマスコミはこれに飛びついて、退位是非の論が新聞紙上や週刊誌を賑わした。驚いたのは一般国民である。マッカーサー元帥と宮内府のもとに、陛下御留位嘆願の熱誠こもった手紙や電報が山積みしたのは申すまでもない。GHQも事の意外に驚いて、7月9日にニューヨーク発UP電として評論家シムス氏の「天皇の退位」はあり得ない旨の論文を各紙に掲載させたが、御退位の噂は一向に静まらなかった。業を煮やしたGHQは、遂に9月11日の各紙に連合軍最高首脳部の見解として左記を掲載せしめた。1、天皇は依然最大の尊敬を受け、近い将来、天皇が退位するというようなことは全然考えられない。1、天皇退位の噂は共産党や超国家主義者の宣伝である。1、現在の天皇が、今後「在位する」ことが、日本国民および連合国の最大の利益に合致する。

陛下と東京裁判の判決

昭和21年5月に始まった東京裁判は、昭和23年11月12日に判決と予定されていた。その日が近づいてくると、御退位の噂はまた高くなった。流石のマッカーサーも心配になって来た。もし万が一、突然、陛下御自身で退位を声明されたらどんなことになるか。今まで順調に進んできた占領政策は一朝にして崩壊する。マッカーサーは心配でたまらなくなった。何としても陛下御自身から退位しないという確約が欲しかった。秦邦彦著「裕仁天皇五つの決断」に、秦氏が昭和53年の晩春、バージニア州ノーフォーク市にあるマッカーサー記念館を訪問し、そこで偶然に発見した文書のことが書かれている。それは、昭和23年11月12日付の田島道治宮内府長官より連合軍最高司令官マッカーサー元帥に宛てられたものである。田島長官は天皇陛下の御下命により、天皇陛下からのメッセージであると前置きして、〈わたくしは閣下が過日吉田首相を通じてわたくしに伝えられたご懇篤かつご厚情にあふれるメッセージに厚く感謝の意を表します。わたくしの国民の福祉と安寧を図り、世界平和のために尽くすことはわたくし終生の願いとするところであります。いまやわたくしは、一層の決意をもって、万難を排し日本の国家再建を速やかならしめるため、国民と力を合わせ最善を尽くす所存であります〉との御言葉を伝えている。日付の11月12日とは東京裁判の判決の日である。秦氏は、これはマッカーサーからの要請によって陛下から退位しないという御意志をマッカーサーに伝えられた親書であると断定しているが、恐らくその通りであろう。マッカーサーはどうしてもこの文書を戴き安心したかったのである。11月12日午後、陛下は表御座所より御徒歩で御文庫に就かれ、御自分でラジオのスイッチを入れられた。ラジオからは間もなく東京裁判の判決断罪の実況放送が流れてきた。この間、陛下は静かに目を閉じて放送に聞き入って居られた。そして、夕食後は、側近者も遠ざけられ、一人部屋にこもって、夜の更けるまで御過ごしになられた由である。

この日から 39 日後の 12 月 23 日、東条元首相以下七士の絞首刑が執行された。この日は皇太子殿下（当時）の御誕生日である。例年この日皇室御一家は夕食を共にされるのが常であったが、陛下は一切の行事を取りやめ、終日、御文庫に御籠り遊ばされていた。陛下の御心の中いかにばかりであらせられたであろうか。陛下はこの秋に次の三首の御製を読まれている。

風さむき霜夜の月を見てぞ思ふかへらぬ人のいかにあるかと

しづみゆく夕日にはえてそそり立つ富士の高嶺はむらさきに見ゆ

たゆまずもすすむがををし路をゆく牛のあゆみのおそくはあれど

まことに畏き大御心である。陛下の御心懐は地下の民らの区々たる思いや論議を超えて、ただ御一人、皇祖皇宗の神霊に対され、全国民を御背負いになられ、国運のゆくてを切々と案じ給うてましましたのである。

御巡幸の復活

しかし、時流はこのなかで既に激流が反転する兆候を示しつつあった。それは日本国民の知らぬところで起こりつつあった。原因は冷厳な世界の動きにあった。米ソの冷戦は激化の一途を辿り、朝鮮半島ではソ連の支持する北鮮が朝鮮民主主義人民共和国として、アメリカが支持する南鮮は大韓民国としてそれぞれ独立し、大陸では中国共産党が圧倒的な戦力で国民党を駆逐しつつあった。日本の弱体化政策をあらゆる面で進めつつあったアメリカも、その政策を転ぜざるを得なかった。ということは、GHQ内部の二つの勢力GS（民政局）とGII（情報、作戦）の比重が逆転するということでもあった。国内の政治面でも 23 年 10 月、このことを反映してか、社会・民主・国民協同三党連立の芦田内閣が昭電疑獄事件で退陣し、自由党の吉田茂が復活し、第二次吉田内閣が復活した。

御巡幸が昭和 22 年 12 月の中国地方以来中断し、その後に御巡幸を予定されていた各県からは宮内庁宛てに復活嘆願書が山積みした。各県議会、市町村議会でも御巡幸再開決議が次々となされた。しかし、御巡幸の復活を最も切実に願われたのは天皇陛下御自身であらせられた。当時の総務課長で、御巡幸再開後は御巡幸実務の最高責任者である行幸主務官となった鈴木菊男氏は「陛下は、一刻も早く復活させたいと願われ、マッカーサーにもお話をされたのではないかと、確信に満ちて語っている。陛下は御巡幸中断後マッカーサーに、23 年 5 月 6 日と 24 年 1 月 10 日の二回会見されているので、その機会は十分あったわけである。その証拠の一つは、アメリカ・ノーフォーク市のマッカーサー記念館に寄託されているエリザベス・ヴァイニング夫人（終戦後四年間、皇太子殿下の英語の家庭教師）の滞日中の日記の昭和 24 年 9 月 25 日の項に、同夫人が当時の吉田首相の別荘に招かれ、同席した樺山愛輔伯爵から聞かされたエピソードとして、「陛下は九州御巡幸を望まれたが、政府は政情不安、身辺の安全問題を理由に反対した。そこで陛下は自らマッカーサー元帥に面会して賛同をとりつけた」とある。宮内庁の林敬三次長や鈴木菊男総務課長

も、GHQに復活を強く陳情した。これらのことが重なって、遂に供奉員を思い切って減員し、すべてを簡素にすることを条件にGHQは御巡幸を許可したのだった。

占領軍、国旗掲揚を全面許可

陛下の強い御意志と国民の熱願によって、やっと御巡幸が再開され、最初に玉歩を印されたのは当初から予定されていた九州の地であった。昭和24年5月18日から6月10日まで24日間、福岡、佐賀、長崎、熊本、鹿児島、宮崎、大分の順で九州七県を御巡幸になった。実に九州の人々は一年半も待ったのであるから、その奏迎ぶりは堰を切った水の如くすさまじいものであった。陛下は24年5月17日午前9時、東京駅御発、この日は京都大宮御所御泊、翌18日、晴れて九州入りをされた。ここで敢て晴れてという言葉を使ったのは国旗「日の丸」の旗の使用がそれまでの御巡幸では禁止されていて、前の中国地方御巡幸ではGS（民政局）の監視人まで附いて来ていたのが、今回は無制限に許可されたからである。昭和24年元日付でマッカーサーは次のような「年頭メッセージ」を出し、日の丸の無制限使用を認めた。〈余がこの挙に出た理由は、一にこの国旗が人類のひとつく探し求めて来た正義と自由の不窮の観念に立脚した平和の象徴として永しえに世界の前に翻らんことを・・・〉GHQは許可したばかりでなく、今度はその掲揚を積極的に奨励した。曰く、「天皇巡幸に際し国旗を掲揚することは、諸君が新日本に揺るぎない信念を持っていることを示すものである」と。前には禁止し、今度は掲揚すべしと御説教をする。軍政とはかくの如きものである。

御製 　　なりはひの栄えゆくべきしるしみえて船はつどへり門司の港に

一千百万人の九州の民が御待ち申し上げる九州路への御召列車は、昭和24年5月18日夕刻、関門トンネルよりすべるように出て来た。一刻も早く陛下の御姿を拝そうと待ちに待っていた人々は喉も裂けよと万歳を叫び、千切れるように日に丸の旗を打ち振る。沿線は日の丸の波、波、波である。陛下は午後7時40分、小倉駅に御着きになった。駅前広場から御宿舎の八幡市・日本製鉄高見倶楽部までの沿道は日の丸の小旗で埋まっている。駅頭では「君が代」が流れ、万歳の嵐、嵐の中を御召車は進む。陛下の御顔が拝されるように御車には室内灯が点けられ、日の丸の旗の波をかき分けるように御車は進む。感激した市民は狂気のように旗を振る。御召車はやがて御宿舎に御到着。九州入りの第一夜を過ごされた。5月19日、陛下は午前9時に御泊所を御出発になり、先ず門司市に向かわれ、奏迎場で三万人の熱誠こもった奏迎を受けられた。次いで、門鉄屋上から門司港と門司の戦災復興状況を御展望になられた。前述の御製はその時の御作である。その後、国立小倉病院を御慰問、小倉高校グラウンド、戸畑浅野グラウンドで両市民の奏迎を受けられた。いづれの場合も、御遺族、戦災者、傷痍者にねんごろな御慰めと激励の御言葉をかけられた。午後は御召艇「清見丸」で海路若松に御上陸になった。この日は若松のみなと祭の最終日で、

御巡幸とみなと祭が重なり奏迎場は大変であった。陛下は再び御乗船になり八幡に向かわれたが、この時、打ち上げ花火を合図に繰り広げられた勇壮豪快な若松名物伝馬船競漕や、満艦飾もあてやかな全国一の隻数を誇る石炭船の作業ぶりを御覧になり、八幡に上陸、八幡製鉄所に入られた。ここは日本の鉄鋼生産の大半、即ち銑鉄は全国生産の五割、鋼材は三割を受け持っている戦後復興の最大の担い手で、従業員は三万五千人、陛下はここを一時間三十分もかかり視察され、従業員を激励された。そして、1400度の高熱の溶鉱炉近くまで玉歩を運ばれた。ドロドロに溶けた鉄の湯が陛下の足元を走るので、その反射熱でお顔は真っ赤である。陛下は1600度という平炉の前にも立たれた。「お暑いだろうに」と、感動に満ちた作業員たちがその陛下を仰いでいる。陛下はこの広大な製鉄所をくまなく廻られ、そこに働く作業員の全てに増産を訴えて廻られたのである。陛下は次いで八幡奏迎場で市民の奏迎を受けられ、御泊所に御帰りになられたが、この日、六十万人といわれる北九州五市のうち、その七割の四十万人が怒涛のように陛下を奏迎した。

5月20日、前日の御巡幸路は北九州の重工業地帯であったが、今日の御予定はその重工業を支える筑豊炭田地帯であった。この日、この地帯特有のボタ山は日の丸の旗で埋まり、増産に励む炭坑労働者や家族をはじめとして約三十万人が奏迎した。陛下は午前9時に御泊所を御出発。二か所を御視察の後、黒崎駅から御召列車で筑豊炭田に向かわれ、直方駅御着。万歳を絶叫し、日の丸を振りに振る市民の奏迎を受けられ、遺族席に進まれ「すみませんでした」「辛抱してください」「ご苦労です」等々の御言葉があり、遺族たちは嗚咽して有難さに頭を上げ得なかった。次に、九州炭坑保安技術研究所、筑豊鉱山高校に御成りになった。三井田川鉱業所は炭坑節で名高い香春獄のすぐ近くである。ここでは九千人の坑夫達が昼夜交替で働いている。陛下は鉱業所の屋上に立たれて奏迎に応えられ、田川市役所で御昼食。午後は、公民館としては全国ではじめてという嘉穂郡庄内村公民館を御視察。次いで、二瀬町の鉱害地では杉本知事に復興の状況を繰り返し質問され、美田を失った人たちを慰め、激励された。3時15分、飯塚駅から再び御召列車で乱立するボタ山を後に二日駅御着、筑紫奏迎場で同地方の人々の奏迎を受け三られ、5時過ぎに御泊所の二日市温泉・大丸別館に入られた。

福岡市の奏迎の人出五十万人

5月21日、この日は福岡市を中心に御巡幸になった。午前には、筑紫郡水城村授産場、貿易館分館、糟屋郡和白村の児童施設「和白青松園」、九州大学、福岡県庁、ここで御昼食を済まされ、午後は、西日本新聞社、西公園、児童施設「松風園」、平和台奏迎場、松屋工業、二日市町営住宅、県立農事試験場と御巡幸になったが、福岡市の奏迎の人出は五十万人に達し、大混雑、市内は人、人、人、日の丸の旗、旗、旗で埋まった。その奏迎の人出の中心は平和台競技場で、ここだけでも七万人が集まった。その時の状況を地元紙「西日本新聞」は次のように報じている。〈七万人の君が代の大合唱は紺碧の空を圧して怒涛のようだ。

御召車がグラウンドを一周するころは歓迎者の興奮はもう最高潮、車上中央から高々と帽子をお振りになる陛下めがけて浴びせるように日の丸の小旗を打ち振る。とどろく万歳、民衆の中の天皇のお顔はひとしお紅潮したように見られた。国民の父として陛下をお慕いする国民の心がすなおに天皇と結びついた一瞬であった。この日はいろいろな感激的なことがあったが、後日、「和白青松園」に「福岡県和白村青松園」の御題で次の御製を賜った青松園であった。

よるべなき幼子どももうれしげに遊ぶ声きこゆ松の木の間に

孤児たちの嬉しげに遊ぶさまを見られてまことにお優しいお言葉を給ひ、孤児たちは父親の如く陛下を慕ったのであった。

満州引揚の孤児、陛下の御服を握って離さず

5月22日、澄み切った薫風の中を、午前9時過ぎ御車は九十万県民が御待ち申し上げる佐賀県に入った。陛下の佐賀県への御成りは実に三十年ぶりであった。沿道の日の丸の旗の波、万歳の嵐の中を先ず第一番に戦災引揚孤児を収容した「洗心寮」に入られた。ここには三十九名のよるべなき幼児、児童がいた。主に満州で両親を亡くした子供たちであった。この寮を苦心創設したのは三養基郡基山町因通寺の住職父子で、寮は寺の境内にあった。孤児たちは父母の位牌を抱いていた。このいとけない孤児たちに陛下は思わず涙ぐまれ、「みんなよく帰ってきましたね。立派な人になって頂戴ね」とお声をかけられ、一人一人に「いくつになるの」とお尋ねになられると「六つ」「七つ」「八つ」「十三」と孤児らは涙ぐんで答える。父はソ満国境で戦死、母は引揚げの途中で死亡、その最後の息の下で「天皇陛下のいらっしゃる祖国は安全だから帰れ」と言われ、叔父に連れられ帰国した小学四年の女の子には「どこから帰ったの」と尋ねられ、二度も頭をなげられた。同じく満州から引き揚げて来た小学五年の男の子が、いつの間にか陛下のお服の端をつかんで離さず、陛下の後をくっついて歩き出した。周りの者が驚いて手を離させようとするが、陛下はニコニコ笑っておられる。そして、とうとうお帰り御車のところまでついて来てしまった。陛下が御車に乗ろうとされた時、その子が「また来てね」と申し上げると、陛下は「また来るよ、また来るよ」とお答えになられた。寺の境内を埋め尽くした奏迎者の中には、声を上げて泣きくずれる人もいた。後日、陛下は「佐賀県因通寺洗心寮」と題され、

みほとけの教まもりてすくすくと生い育つべき子らにさちあれ

と御詠みなさっている。この「洗心寮」よりか所にお立寄りの後、佐賀県庁に向かわれたが、奏迎の人波で御召車は立ち往生し、十重二十重の大群衆の歓呼に何度も御帽子を振ってお応えになりながら県庁へお入りになった。午後は市民奏迎場に臨まれて県民の赤心

に応えられ、大和紡佐賀工場では労組の組合員を激励され、厚生施設「協樂園」では二十四世帯の未亡人を一戸毎に訪ねて激励されたが、戦死者未亡人には「すまないことをしたね」との御言葉があり、周りの者は皆ハンカチを取り出して涙を拭った。

高校生、鈴なりになり御召車を押す

5月23日、この日は雨であった。しかし、御召車の進むところ沿道はどこもかしこも万歳の嵐と日の丸の旗の波であった。午前中は、佐賀板紙、杵島炭坑、佐賀農業高校、国立嬉野病院を御視察、御慰問されたが、佐賀農業高校では泥濘のため御召車が動かなくなるというハプニングが起きた。ここではワラの加工を御覧になったのであるが、発車しようとしてもすべて発車しない。よし来たと、高校生が鈴なりになり御召車を押しに押し校門までバック、ようやく御出発に間に合ったが、御付きの車二台は随行に間に合わなかった。誠にほほえましい君民一体の姿であった。佐賀農高から嬉野病院までは、ここも延々と続く人垣、旗の波で、陛下はそれにいちいちお応えになって居られたが、藤津郡五町田村塩田橋で突如停車を御命じになって御下車遊ばされた。これは同村の済昭園の孤児たちが並んでいるのを御認めになったからであった。これは全く御予定になかったことで、驚いている十九人の孤児たちに「勉強していますか」「いい人になって下さいね」と、笑顔で御言葉を賜ったのであった。午後になって雨はすっかり上がり、県西部各地の奏迎を受けられつつ、嬉野茶業試験場では二十名の乙女の茶摘みを御覧になり、次いで有田焼の現場を御視察になり、武雄市の春慶屋旅館に午後5時過ぎ御入りになられた。

突如御車の停止を命ぜられ、開拓者を御激励

5月24日（昭和24年）、この日は午前8時半、武雄より県北に向かわれ、途中蔽木中学校で県下学童の二千点に及ぶ作品を御覧になり、唐津に御到着。市内鶴舞公園で玄界灘を展望され、唐津校グラウンドで二万余の奏迎を受けられ、午前11時30分に東唐津駅を御出発、12時40分、伊万里駅御着、駅前広場で同地方四万人の奏迎を受け入れられ、長崎県へと向かわれた。午後1時55分、陛下は長崎県の北端平戸駅に御到着。駅では北松浦郡各町村長、同議長、その他の奏迎を受けられ、次いで潜竜ヶ滝駅御着。潜龍炭坑に御徒歩で向かわれ、出炭の第一線の抗夫を激励され、午後4時に佐世保市に御到着。駅頭を埋め尽くした三万人の熱誠なる奏迎を受けられ、大阪鋼管、大里町引揚者住宅を御訪ねになった。そこでは引揚者十五世帯の一軒一軒にお声をかけて廻られ、お出迎えした遺児たちに「お母さんのいうことをよくきいて勉強するんですよ」と、優しくお声をかけられた。次いで市民グラウンドで市民の奏迎を受けられ、佐世保船舶工業に御成りになった。広い第三ドック前には赤さびた巨大なくず鉄が山と積まれていた。それは、帝国海軍軍艦三十数隻の変わり果てた姿であった。陛下の御感慨いかばかりであらせられたであろうか。陛下は、「このドックは戦時中、陸奥、長門級戦艦の専用ドックでございました」という社長の説明を聴かれつつ、佐世保港をじっと見渡されるのであった。かくて第一日目のご日程を終えら

れ、午後6時、御泊所の佐世保市・山水楼にお入りになられた。5月25日は前日の曇天とは打って変わり、五月晴れの雲一つない快晴であった。この日も前日と同じく沿道は日の丸の旗で埋まり、午前7時頃から御泊所の付近は奏迎の人、人、人で一杯となり、御車は奏迎の人々に取り囲まれて何度か止まり、日の丸は千切れて御車の上に降り注いだ。午前8時半、佐世保を御出発になった陛下は先ず高島真珠養殖場を見学され、次いで川棚町国際陶器、同奏迎場を経て、大村に向かわれたが、この国際陶器は元神雷特別攻撃隊基地魚雷工場であった。千綿村役場で十分間の御休憩の後、沿道にひざまづく奏迎者に会釈されつつ元大村海軍航空隊跡にさしかかるや、突如、停止を御命じになり御下車、開拓者を御激励になった。まったく御予定外のこと、入植者は感激のあまり万歳を叫ぼうにも、全員がすすり泣くのみで声が出ず、涙、涙で陛下をお送り申し上げた。その後、大村から諫早を経て南高来郡深江村の県立種馬育成所に御成りになり、御召列車で島原に午後4時過ぎ御到着。同地方二万人が御待ち申し上げる奏迎場では居並ぶご遺族を御慰めになり、「君が代」の大合唱と万歳の嵐を御受けになった。かくて御車は新緑に映えて雲仙つつじが満開の歓迎の中を雲仙岳に登り、温泉の湯けむりに包まれながら午後5時半、御泊所の九州ホテルにお入りになり、夜は知事の県政一般の奏上を受けられた。

「天皇陛下は巡礼ですね」

5月26日は御休養日であった。この日も全くの改正で、鶯が満開のつつじからつつじへと飛び交う御旅情を御慰め申し上げていた。次の御製がそれを物語っている。

御製 高原にみやまきりしまうつくしくむらがり咲きて小鳥とぶなり

午前9時半に御泊所を出られ、妙見岳の中腹仁田峠で御下車、展望台に立たれた。眼下に展開する有明海、遠く阿蘇の連峰を眺められ、「ホウ美しい」と感嘆された。田島宮内庁長官が「あのあたりが阿蘇でございます」と御説明申し上げると「アソー」と答えられ、そのユーモアに侍従らが苦笑し、陛下も声をたてて笑われた由である。それから二時間ほど山中を御散策、植物を観察遊ばされ、ホテルに戻られ御休養遊ばされた。5月27日午前9時、雲仙のホテルを御出発、小浜町東芝製塩場を御視察後、愛野展望所で橘湾、島原半島、天草等の景色を賞でられ、諫早市奏迎場で三万人、小浜町では一万人の奏迎を受けられ、長崎市の入口でオープンカーに乗り換えられて市内にお入りになられたが、奏迎の大群衆は御通路をことごとく埋め尽くしてお待ちしていた。陛下は長崎地方裁判所で御昼食後、魚市場を御視察、次いで西坂公園では一万人の送迎を受けられ、記念に楠の若木を御手植えになり、四百隻の船舶が日の丸を掲げて奏迎する長崎港を御展望、長崎医大にむかわれた。ここでは、原爆で妻を亡い、自分も被爆者治療中に原爆症に斃れて死の病床にある永井隆博士を親しくお見舞いになられた。博士には闘病中に書いた「長崎の鐘」「ロザリオの鎖」「この子を残して」等の著作があった。陛下は寝台に寝たままの博士の病床へつかつかと寄られ、「どうです、御病気は」と優しく問いかけられ、「あなたの書物は読みました」と仰せられ、枕辺の長男誠一君（当時14歳）と長女茅野さん（同9歳）にもいたわりのお

言葉をかけられた。博士は、この日のことを、

天皇は神にまさねばわたくしに病いやせとぢかにのたまふ

と歌に詠み、次の如く述懐した。〈天皇陛下は巡礼ですね。形は洋服を御召しになっていても、陛下の御心は、わらじばきの巡礼、一人寂しいお姿の巡礼だと思いました。〉

そして二年後の昭和26年5月、博士はカトリック信者としての一生を終えた。

長崎市原爆地

永井博士を見舞われた陛下は、七万人が一瞬のうちに死者となった爆心地を御覧になりつつ市民奏迎場へ向かわれた。爆心地には白い記念塔が建てられ、付近にはアメのように曲がった鉄骨が赤さびて立っている。遠く浦上天主堂の被爆の跡も見える。浦上球場の市民奏迎場に御着きになった頃から小雨が降りだしたが、グラウンドを埋めつくした五万の大群衆はみじろぎもしない。「君が代」の大合唱が終わると、陛下はマイクの前に進まれ、一枚の紙片をひろげられた。広島市に次ぐ異例の御言葉である。

〈長崎市民諸君、本日は長崎市復興の状況を見聞し、また、市民の元気な姿に接することができてうれしく思います。長崎市民が受けた犠牲は同情にたえないが、われわれはこれを平和日本建設の礎として、世界の平和と文明のために努力しなければならぬと思います。〉 スピーカーから流れるお声は一語一語力強く会場のすみずみにまで響いた。御言葉が終わるや堰を切ったように万歳の声が爆発、五万の大群衆は感激の涙に濡れて日の丸を打ち振り、陛下は何度も何度も御帽子を高く高く振られるのであった。陛下は更に長崎市内の三菱造船所を御視察、同所貴賓館の御泊所にお入りになり、同夜は県内各界代表をお招きになって県内事情を御聴取あらせられた。陛下は翌朝午前9時25分、長崎市民の熱烈な御見送りを受けられ、佐賀県を御通過、再び福岡県に向かわれた。

再び福岡県へ

5月28日午後1時10分、御召列車は久留米駅御着。駅頭を埋めた万余の奏迎者は熱狂の余り道路をふさぎ、御車は動いては停まり、停まっては動く。ようやくのことで日本タイヤ久留米工場に入られた。次に久留米医科大学、ここで風土病日本住血吸虫症についての研究の説明を受けられ、病原虫について詳しい御質問があった。大学のグラウンドが久留米市民奏迎場であった。ここで五万人の市民から万歳の嵐を受けられ、次いで日華ゴムに御成りになり、その後、久留米市の南部、旧輜重兵聯隊跡の引揚者、戦災者住宅へ御車の列は進む。兵舎を改造した住宅は、中央廊下で南側と北側にわけられた十軒長屋である。天井もなく、うす暗く、土壁の臭いが鼻をつく。陛下は無造作に第一号の部屋にお入りになり、それから同じ側の家を次々にたずねられ、いちいち、慰めと励ましの御言葉をかけられ、隣の保育所へ玉歩を運ばれ、幼児達の遊戯を御覧になった。先ほどから関係者は皆泣いていた。御退室される陛下を、幼児達が「バンザイ」を連呼して迫った。陛下はニコニコと振り返られ、とうとう入り口まで後ずさりされた。御召車は万歳の嵐の中を静かに動

き出して、この旧兵舎を後にされた。久留米市を出た御車は麦の穂波がそよぐ筑後平野を一路南下、八女奏迎場で同地方の奏迎を受けられ、日の丸の旗の波の中を同郡水田村に御到着。共同苗代の播種を御覧になり、三潞郡木佐木村で藺草から畳表、花莫産が作られる状況を御視察。その後、水郷柳川へ入られた。そこで御車を降りられ、沿道に正座する遺家族、高齢者達を慰められた。万歳の歓声が、すすり泣きを混えて水郷に響いた。

十万匹の蛍、矢部川の清流に映ゆ

かくて、この日の御予定を終えられた陛下は、午後 5 時過ぎ御泊所の船小屋観光ホテル樋口軒にお入りになられた。ここは矢部川の清流に臨む閑雅なところであるが、向う岸には手に手に日の丸を持った奏迎者が溢れ、「君が代」の調べと万歳の声が薫風に乗り川を渡って陛下の御耳に達した。陛下はわざわざ御部屋から御庭へ出られて、何回も何回も御手を振られた。ようやく御居間にお戻りになり、御湯を召し、御夕食を済まされ、県教育委員長と同地の篤農家の御進講が終わった午後 8 時頃、向う岸では今度は提灯行列である。そして蛍の名所にふさわしく、小学生たちが数日ばかりで捕らえた十万匹の蛍が一斉に放たれた。陛下は提灯を御手に、これに応えられた。清流に映えて光る蛍、蛍、蛍。振られる提灯。「君が代」と万歳。まことに君臣和楽の絵図であった。群衆は 9 時を過ぎても帰りそうもない。遂に拡声器で呼びかけて家路につかせた。群衆が去った清流には、蛍に混じって河鹿が鳴き続けた。

御製 海の底のつらきにたへて炭ほるといそしむ人ぞたふとかりける

船小屋温泉に一夜を過ごされた陛下は、5 月 29 日午前 9 時、同地を御出発、10 時三池炭鉱三川鉱正門前に御着きになられた。山川社長の御案内で更衣室に入れ、三池炭鉱の説明を受けられ、陛下は上衣を脱がれ、真白な作業衣、白脚絆、白手袋、白の坑帽を御着装になられた。坑帽にはキャップランプが光る。白づくめの坑内服の御姿で、御手にピッケルを持たれた陛下は何か勝手が違った御様子で、傍らの侍従を振り返ってニッコリされた。更衣室から第一坑入り口まで整列する六千人の作業員の万歳の嵐でのお迎えに応えられ、坑内に入る人車に乗られた。やがてワイヤーロープ一本に托した人車は坑底に向けて発進、海底への傾斜三十度、分速 160メートル、行程 2000メートル、地下水の飛沫を浴びながらゴウゴウと真っ暗な坑道を突っ走って、12 分で地底のプラットホームに御到着。ここは地下 1500メートルで、換気のため有明湾から送り込まれる秒速 10メートルの風が吹いている。陛下は出炭の最前線の切羽へ向かって玉歩を運ばせられる。坑道の高さは 2メートル半、見事な炭層の中に陛下の真白い坑内服が浮かび出て、畏さ限りない。所長が先頭で、陛下は二番目である。坑道にはキャップランプを付けた坑夫 300人が並び、その紅潮した顔が陛下のキャップランプに照らし出される。「毎日ご苦勞ですね。どうかしっかりやって下さい」御激励の言葉に、坑夫の顔が感極まってピクピク動く、通り過ぎられた後姿を万歳の嵐が追う。陛下は何度も振り返って白手袋の御手を振られる。坑道は次第

に狭くなり、爆風防止用の真白い石粉が坑壁一杯にまき散らしてある。炭坑の心臓部に近づいたのである。陛下の御靴は石粉で真白である。プラットホームから600メートル歩かれた。いよいよ切羽である。採炭機がものすごいうなりをたてて石炭をかき集め、チェーン・コンベアーに流し込み、炭車が次から次へと走る。濛々たる炭塵が立ち込め、やや紅潮された御顔にそれが吹き付け、御眼鏡が曇る。陛下は今、三池海底炭坑の切羽の第一線に立たれたのである。温度は33度、湿度85%で蒸し風呂のように熱い。呼子の笛の合図で機械はピタリと止められ、汗びっしょりになった山川社長が御説明する。再び機械が猛獣のように動き出す。陛下はチェーン・コンベアーに乗って溪流のように流れ出る石炭へ御満足気に御眼を注がれる。坑夫たちに次々と御言葉をかけられる。「健康状態はどうかね」「暑くはないかね」「苦しいだろうが、採炭は大切な仕事だからしっかり頑張ってください」御激励を受け、坑夫の感極まった顔、顔。陛下のキャップランプがひときわ明るく輝き、万歳の声が大きく地底にこだまする。陛下は次いで貯炭場へ着かれた。コンベアーで運ばれてきた石炭を地上へ送るところである。ここでも陛下は、炭塵をあびながらじっとのぞきこまれた。ここから帰途につかれ、途中でお待ちしていた職員組合長、同労働組合長等に御言葉を賜る。秒速10メートルの炭塵の風で、陛下の御顔もすっかり汚れた。かくて御歩行往復1200メートル、1時間5分に及んだ陛下の坑内御視察は終わった。午前11時27分、斜坑を上がって人車から降りられた陛下は、さすがにお疲れの御様子で、地上の空気をうまそうに深呼吸を一度、二度繰り返され、万歳の嵐に送られて三池を後にされた。陛下の坑内御視察は、昭和22年8月の東北地方御巡幸の際、福島県常磐炭鉱以来二度目であるが、今回の如く作業衣をつけて坑夫と同じ服装で、薄暗い坑道を御歩きになって切羽まで御廻りになったのは初めてのことであった。そのお姿は神々しいと申し上げる以外になかった。

六万余の大歓呼、熊本城の森をゆるがす

九州御巡幸第11日目の5月29日午後2時、福岡県大牟田駅を発した宮廷列車は福岡、熊本県境を超え肥後路に入った。沿線には朝から奏迎の人々が並び延々と続く。陛下は日の丸の旗波、万歳にお応えになりつつ午後3時7分、熊本駅御着。駅前広場は御着きの1時間前から身動きならぬ超満員である。陛下の御姿を拝するや、待ち構えた大群衆は熱狂して万歳を絶叫する。陛下はオープンカーに御乗車、旗の波と万歳の嵐の中を県庁に御到着。知事より県政の概況その他を聴取遊ばされた。その後、御召車は国立隈本病院に御成りになり、陛下は、引揚者や復員者の重症患者にねんごろな御見舞の御言葉を賜った。次に、熊本城に入られ、元砲台の展望所で苛烈な戦災を受けた熊本市街の復興状況を御覧になられた。陛下は次に熊本医大校庭の市民奏迎場に御成りになった。ここには午前11時頃より集まり始めた六万余の大群衆がお待ち申し上げていた。陛下が奏迎台に上がられると六万余の大歓呼は天地にとどろき、熊本城の森をゆるがした。ここから熊本日日新聞社へ廻られたが、奏迎の人々が押し寄せて身動きならず、宮内庁長官や侍従長が懸命になって

御通路を開けなければならなかった。かくて午後 5 時、御泊所の知事公舎に入られた。夜は三名の代表者による御進講を聞召された。御泊所のあたりは、菊池郡隈布町の有志らがそっと放した数千匹の螢が飛び交っていた。5 月 30 日、陛下は早朝、御泊所玄関わきで、黒松と桑の種を御播きになられ、午前 9 時に御泊所を出られ、先ず熊本製紙株式会社へ、次いで社会施設「慈愛園」に御成りになった。陛下は先ず幼稚園児四十五名の、「天皇様よくいらっしゃいました」という御挨拶にニッコリされ、大きなお声で、「はい」と御返事になり、園児の唱歌と遊戯に御頬をほころばされ、じっと見入られ、みんなが精一杯の声で「天皇陛下万歳」を叫ぶと、御自ら帽子を高く御振りになって、思わず「万歳」を唱和されてしまわれた。続いて、居並ぶ遺児、孤児、高齢者、遺家族の前では、いちいち立ち止まって御優しい御言葉をかけられつつ園内を一巡され、最後に盲聾啞者の前へ立たれた。これらは熊本盲学校と熊本聾学校の生徒であった。彼等は見えぬ眼を見張るようにして、御足もとを聞き漏らすまいと耳をそばだてており、また、もの言えぬもどかしさを眼元、口元に現していた。陛下はその一人一人に慈愛の御瞳を配られ、御激励の御言葉を賜った。「聞こえましたか、天皇陛下のお声ですよ」と先生が目が見えない子供たちに説明すると、うなづいた子供たちの頬に期せずして白い玉がこぼれ落ちた。そして聾者には、先生が陛下の御言葉を手話で伝えると、突然その中から異常な調子で「バンザイ」と三たび叫ぶ声があった。それは愛敬久子さんという聾者であった。陛下は痛く胸をお打たれになり、御眼をうるませ給うて御うなづきになられた。次いで健軍転用住宅へ向かわれた。ここでも戦災者と引揚者を見舞われ、熱狂した万歳を受けられ、肥後製紙会社を御視察、いったん熊本に戻られて、隈府街道を北上、菊池郡合志村の県立種畜場で畜産関係者を激励された。再び熊本市への御帰途、恵楓園というハンセン病療養所の軽患者 600 名が奏迎しているのが陛下の御眼に止まった。すると突然停車を命じられ、御下車になった。患者達は、わざわざ御車を止めて御下車になり、御言葉を賜った御心にむせび泣き、御車が見えなくなっても容易にその場を立ち去らなかつた。

天皇旗燦として御召船天草島へ

御召車は熊本より、今度は麦秋の肥後平野を南下、下益城郡隈庄町の開拓地に御到着、開拓団員を御激励になり、宇土駅から御召列車に御乗車、午後 4 時前、三角駅御着。

御召船「北松丸」御乗船になられ天草へ向かわれたのであるが、三角港には二万数千人が詰めかけ、海上には漁船、機帆船がひしめき、万歳の嵐で陛下をお迎えした。天皇旗が御召船のマストに高くするすると揚るや、万歳の声は海陸を圧した。御召船が三角の瀬戸を出て新緑燃ゆる島々を進むと、小舟に乗った老若男女の家族、ポンポン蒸気船に同乗した小学生、五隻、十隻、二十隻と小舟を繋ぎ合わせた一部落の奏迎陣、島々の岸壁、砂浜、木陰に群れ集う人、人、人、それが小旗を振り、大旗を押し立て、双手を挙げて声を限りに絶叫する万歳の嵐、それは陸上の送迎では見られない風景であった。陛下は御感も一入で、今にもお声をかけられそうな御風情で帽子を御振りになられた。天草松島を過ぎると

湯島が現れ、遠く雲仙の山々が見える。つい先日御登りになった所であるので、ご興味深く双眼鏡を御取りになる。離島らしい離島への行幸はこれが最初であられる。かくして二時間半の海の御旅は御満足、平安のうちに午後6時10分、本渡大矢崎港に御着。本渡では明日31日に正式な奏迎式があるのだが、それは待てなかった。御泊所の下田温泉に向かわれる御召車が近づくと、御通行の余地ないほどに群衆の小旗と万歳が御車を包み、徐行又徐行、しばらく街を抜け出ても、沿道は家ある限り人の列。莫産の上に端座して頭を地につける老婆あり、ハンカチを眼に押し当てて戦死者らしい写真額と共に御迎えする若い婦人あり、至る所に劇的な場面が繰り返され、陛下はそのすべてにお応えになられるのであった。山間の上村開拓地では団員五、六十名が奏迎していた。陛下は停車を御命じになり御下車、御励しの御言葉を賜った。天草の下島は山また山である。その山間を縫うこと1時間40分、西海岸の天草灘に面する御泊所の下田温泉・望洋閣に午後8時近くに御到着になられた。5月31日午前8時10分、陛下は御泊所の展望台に上がられ、早朝より海岸一帯を埋め尽くした同地方万余の奏迎を受けられ、8時50分、御泊所を御出発になられたが、ここで御見送りした高浜下田村北小学校校長は次の如く語った。

〈私は生徒達に午前7時に御展望所前に集合するように言っておきましたが、早いものは夜明けから集まり6時には全員整列してしまいました。多数の生徒の中に二人か三人かは、他郷で陛下を拝する者が長い一生のうちにはありまじょうが、大部分の者はこのへき地で一生を送るので、陛下をお側近くに拝することは到底できない者ばかりです。ところが今日は、自分たちの家の近くでお迎えできたのです。私は児童の喜びを十分に表現できません。陛下が御通過なされる時は一斉に万歳を唱えるのだとみんなに申しておきましたが、どうでしょう。叫ぶにも声がつまってしまっただけ旗を打ち振るだけです。これは父兄も同様で、頭が上がらず陛下の御顔を拝する事ができなかったとっていました。熱心に旗を振っているあの女の生徒をごらんください、父を戦地で失い、母は病死したかわいそうな子供ですが、一里もある黒部部落から午前4時に起きて歩いて来たのです。国の再建は子供に期待せねばなりません。今日の感激は生徒達の胸に終生残り、大きな励ましになったと信じます。〉(熊本日日新聞) この小学校長の感慨は、おそらく全島民の感慨を代表するものであろう。

御休養日も返上されて御巡幸

6月1日、梅雨そば降る中を鹿児島県へ入った宮廷列車が最初に停車したのは出水町であった。駅前広場には二万人が熱狂してお迎えした。次は、川内市である。駅からオープンカーで送迎場の川内高校校庭に向かわれた。そこには雨の中を三万人がお待ち申し上げていた。次は伊集院町で、二万人がお待ちしていた。御停車の無かった各駅、沿線にも奏迎者は堵列して万歳を叫び、陛下はそれに間断なく御手を振られるのであった。御召列車は午後6時過ぎ鹿児島駅に御到着。駅頭から御泊所の岩崎谷荘までの御道筋は身動きもできない人、人、人、旗、旗、旗の波である。鹿児島市はこの日午前中より仮装行列が繰り出

し、午後からは市内八ヶ所で芸能大会が開かれ、そこへ陛下の御到着であるから、物凄いな出となった。御泊所に向かう御召車は棧橋通りで熱狂する群衆に取り囲まれ、とうとう立ち往生してしまい、やっとのことで岩崎谷荘に到着された。翌6月2日は当初御休養日であったが、県民の熱誠を容れられ、午前中、始良郡方面を御巡幸されることとなり、午前9時半、小雨そぼ降る中を御出発、桜島を右に磯街道を西進、加治木町の加治木高校の奏迎場に到着された。ここは20年8月1日に空襲を受け、作業中の生徒14名が爆死したところでもあった。陛下は遺族の中に「加中生徒戦災死亡遺族席」とあるのに御気づきになり、つつかと御近づきになった。町長が爆死のことを御説明申し上げると、陛下は御眼を潤ませ給い、「それは本当に気の毒でしたね。日本再建のためにしっかりやってくださいね」と、心から思いやりの御言葉をかけられた。我が子の遺影を抱いて奏迎していた遺族の一人がワッと泣き伏すや、遺族席はたちまち嗚咽の場となってしまった。陛下もしばし立ち去りかねた御風情であった。やがて後ろをふりかえられながら、すすり泣く遺族たちに御いたわりの御まなざしを何度も向けられた。ここには始良郡各町村から五万人の人々が集まっていた。君が代斉唱の後、爆発した万歳のどよめきに陛下は何度も応えられた。御帰路は帖佐町タバコ耕作地で御下車、初めてタバコの栽培を御覧になり、同地方帖佐町、山田村、蒲生町民三万余の奏迎を受けられた。正午、御泊所に帰られ、午後は休養遊ばされた。

五万の雨傘サッと閉じ、五万の日の丸の旗サッとあがる

6月3日、御泊所の岩崎谷荘を午前9時に出入り、県庁で特産物を御覧になり、次いで雨に煙る新緑の城山に登られて市内を御展望になり三か所を御視察、沿道の熱狂する市民に帽子を振られつつ鴨池の市民奏迎場に到着された。早朝から詰めかけた奏迎者は五万、身動きもできない。陛下はグラウンドの水たまりも平気でジャブジャブと御歩きになるので、御ズボンの裾も御靴も泥だらけである。降る雨でグラウンドは傘で埋め尽くされていたが、「君が代」の吹奏と同時に五万余の旗は一斉にピタリと閉じられ、日の丸の旗がサッと上がった。万歳の嵐に何度も何度も御答えになった。熱狂した群衆は御帰りの御車を惜しみつつ、容易に御発車が出来なかった。ここより水産専門学校に御成りになり、御昼食。午後2時、天皇旗翻る御召船「第一垂水丸」に御乗船、沿岸を埋める十万余の市民の万歳と、港の内外に停泊する船舶が一斉に鳴らす汽笛に送られて鹿児島港を御出発になられた。この頃雨はほとんど止み、暫く腫れあがる桜島の南岸沿いに御召船は錦江湾の岸辺近くを進む。かくて一時間、垂水港御着。ここから御召車で錦江湾東岸を南下、沿道の歓呼に応えられつつ午後4時10分、鹿屋の市民奏迎場へ御着。二万余の奏迎を受けられ、福岡通商局鹿屋無水工場を御視察の後、御泊所の鹿屋市・平田邸に入られた。

宮崎県へ

6月4日、鹿児島御巡幸は連日の雨であったが、第四日目のこの日は久しぶりに朝から晴れ渡った御巡幸日和となった。午前8時半、鹿屋駅御発、大隅半島の東海岸の志布志駅に

御到着。志布志港を御展望後、野井倉開墾地を御視察、志布志高校の奏迎場で二万人の奏迎を受けられて、宮廷列車で宮崎県へと御発ちになったが、途中、石川駅では駅東側の田甫に設けられた奏迎場で同地方の奥地から五里、六里の道を早朝から歩いて集まった約三万人の歓呼を受けられた。かくて、午後1時半、鹿児島と宮崎の県境を越えた宮廷列車は、滴るような新緑と旗の波の中を、都城駅に御到着。駅前広場を埋め尽くした奏迎者にお応えになり、片倉製糸、森山産業を御視察。次いで都城市民生館に御成りになった。ここは市営で、館内には母子寮、保育所、養老院、授産場がある。陛下は母子寮の一室一室を廻られた。ほとんどが戦争未亡人で、部屋の片隅には亡父の位牌や遺影が祀ってある。その一部屋毎に御慰めの御言葉をかけられた。ある部屋では、畏くも、「裕仁です」と御名を御名乗りになった。皆は泣き伏した。施設の全部を廻られ、小松原中学校校庭での市民奏迎場では三万人の熱烈な万歳を受けられた。ここは昭和10年の陸軍大演習の大本営が置かれた所であった。かくて4時45分、御召列車で宮崎市へ向かわれ、6時、当地に御着、御泊所の紫明館に御入りになった。しかし、熱狂した市民は去ろうとしないため、陛下は二階の窓から数回御会釈をされた。御入浴後も万歳の声が続き、それに応えられるため再び御出ましになられた。

全盲の少女、手さぐりで陛下の御洋服に触れる

6月6日午前9時半、御泊所を出られて県営授産場、県庁を経て県営グラウンドの市民奏迎場に御到着、三万余の群衆の奏迎を受けられた。次いで、郡是製糸検査所を御視察の後午前11時半、県立盲学校に御成りになった。ここは小学、中学、高等の各生徒四十七名が学んでいる盲学校であった。陛下の御成りを知らされた学校では困った。何分、全盲の生徒たちである。陛下をどのようにして身近に感じさせることができるか、学校としては色々考えた末、陛下以外の側近や新聞記者、その他全員が靴を脱ぎ、陛下のみの靴音で御出ましを知らせるということになった。これには多少新聞記者が不平を漏らしはしたが、不自由な子供たちのためにといいことで、これを承知した。間もなく教室近くの廊下から、コツコツと靴音の音が聞こえてきた。教室内の全生徒たちは全身を耳にしていた。陛下が小学二年の教室（生徒数六名）にお入りになられた。「天皇様が、今あなたたちの前に立っておられますのよ。どこか判りますか」という先生の声に、陛下が一番近いところに立っていた村社まつ子さん（当時10歳）が思わず知らず一歩二歩と、両手を前に差し出し進み出たが、あらぬ空間を手探るだけで、陛下が分らない。陛下はこの可憐な姿を見られて、御自ら御身体を、まつ子さんの方へとにじり寄せられた。「まつ子ちゃんの右前よ・・・」「そうー」少女は左右の手を差し出して探し求める。陛下はさらに、にじり寄って御身体を擦り寄せられた。「ここに居るよ」と陛下はおっしゃりたいご様子であるが、強く御感動遊ばされていて、御言葉が出ない。まつ子さんの手が、やっと陛下の御洋服に触れた時、父兄会の人々も先生も、声を上げて皆泣いた。陛下はまつ子さんをジッと見つめておられる。そして御眼を潤みがちに二、三度しばたたかれた。「不便でしょうが、しっかり勉強して、

立派な人になって下さいね」と優しくさとされる。生徒たちは不自由な眼をしばたかせてうなづく。陛下が教室から廊下に出られたとき、生徒たちは一斉に、「天皇様、さようなら」と叫んだ。そうすると陛下は再び教室に戻られて、六名の生徒の一人一人の前に玉歩を運ばれ、「さようなら、さようなら」と名残を惜しまれた。居並ぶ人々は再度熱い涙にむせんだのであった。陛下は次に、生徒数五名の中学二年生の教室に入られた。ここは点字で「平家物語」の一部を朗読中であつた。次に高等部二年生のマッサージの実習を御覧になって、最後に講堂で全校生徒に会われた。小学五年生の一人が代表して、「天皇様、御待ちしております。私たちは本当にうれしゅうございます」と奏迎の言葉を述べた。陛下は全生徒を見渡され、「先生のいうことをよく聞いて勉強して、立派な人になって下さい」と述べられ、同席した卒業生にも御言葉があつた。光を失つた不幸な人々の幸いを御祈りになる陛下の大御心が皆の胸にひしひしと迫り、見えぬ眼にみな涙が光っていた。

宮崎神宮に御参拝

盲学校を出られた陛下は、初代神武天皇を祀る元官幣大社宮崎神宮に御到着。徴古館で御昼食を召され、玉砂利を御踏みになって神宮大前を御参拝になられた。これより御車は宮崎市を出て北に向かい、都農駅で宮廷列車に御移乗、一路県北の延岡に向かわれたのであるが、この間、住吉村の樹苗研究農場、高鍋町奏迎場、川南町の伝習農場、国立療養所、唐瀬原開拓地等を御視察、御慰問になられた。いづこも日の丸の旗と万歳の絶叫が続き、感動の場面が次々と繰り広げられた。国立療養所では結核病棟の入口でマスクを院長がおすすめしたが、陛下は患者の気持ちを察せられてか、それを断られ、患者一人一人に腰をかかめて優しく御励ましになられた。御言葉に一患者はワッと叫ぶように泣き出し、すすり泣きが所内に漲った。かくして午後4時30分、都農駅御発、約1時間にして小雨そぼ降る中を延岡駅御着、「君が代」の斉唱に迎えられ、万歳の嵐の中を城山の展望台に御成りになり、市長の説明を受けられ、6時、御泊所の喜世ツ園に入られた。6月7日は雨だった。宮崎県御巡幸の最後の日である。午前9時前に御泊所を出られ、延岡奏迎場で一万余人の熱誠を受けられ、次いで門川港に御到着。ここは漁港であり、陛下に海の幸を御見せしようと漁船群が遠く薩南諸島まで出漁、見事5000貫（約19トン）のカツオを獲って帰ったばかりであつた。陛下は「ホウ大きいね」と御喜びで、同地奏迎場では三万人の熱誠を受けられ、次いで細島港を御視察され南延岡駅に御到着、宮崎県最後の奏迎を受けられ、宮廷列車で大分県へと向かわれた。

阿南大将未亡人を召され御慰めの御言葉

6月8日午前9時半、降りしきる雨の中御泊所を出られた陛下は、先ず県庁に御成りになり、知事から県政一般についての奏上をお聞き召され、県議事堂内で特産品の実演と陳列を御覧になり、次いで遺族たちの前に雨傘を御手に玉歩を運ばれた。ここには県下の遺族代表千六百名が御待ちしていた。陛下は母子寮や授産場に入られ、未亡人や遺児たちを次々

に慰め激励された。その中に、三人の息子を失った遺族の一人が三枚の写真を胸にしているのが御眼に止まった。陛下は足を止められて、「苦しいでしょうが、頑張ってください」と心から慰めの御言葉をかけられた。この老父は、三人の息子を失った大分郡東植田村の佐藤惣太郎さん（当時 68 歳）で、長男の遺児の孫の忠子ちゃん（同 7 歳）の成長を楽しみにしているお百姓さんであった。陛下はそのあどけない少女のおかっぱの頭を撫でられ、顔をのぞき込まれ、「どうぞ、大きくなってね」とおっしゃった。忠子ちゃんは、にっこり笑う。それを見て、老農夫は泣き伏すのであった。陛下は、小雨の中を片手に傘を、片手に帽子を御持ちになって遺族の前を進まれたが、その中には終戦の 8 月 15 日に自決した、陸軍大臣阿南惟幾（これちか）大将未亡人綾子さんがいた。阿南大将は、大分市から 4 里離れた玉来町という草深い山間の農家が実家である。大将が自刃されてから未亡人は、四人の遺児を連れて、大将の実兄が農家を継いでいる実家に身を寄せて、ささやかなお百姓をして世をしのんでいた。陛下の御巡幸を知ったが、自分のような者が陛下の御前に出れば、陛下は当時のことを思い出されるであろうから申し訳ないとして、奏迎を遠慮することに心を決めていた。阿南大将は昭和 4 年 8 月から 8 年 8 月まで 4 年間、侍従武官として親しく陛下の側近にあった。そして終戦時は、全陸軍を代表し徹底抗戦を主張した。陛下の御聖断によって終戦に決したが、阿南大将は国体護持に不安があるとして、最後まで陛下の御袖にすがって御翻意を願った。陛下は、「阿南、心配するな、私には確証がある」と、かえって大将を慰めるような御言葉を賜った。通常は陸軍大臣と御呼びになるのだが“阿南”と姓と呼ばれたのは、異例であった。8 月 15 日の未明、陸軍大臣阿南惟幾は、「一死以って大罪を謝し奉る」「大君の深き恵みに浴みし身は言い遺すべき片言もなし」の遺書と辞世を残し、全陸軍を代表して自刃した。その阿南未亡人のところへ 6 月 7 日夜 11 時頃、侍従からわざわざ電話があって、出てくるようにとの聖旨が伝えられたのである。綾子未亡人は雨の中、大勢の遺族たちに混じって陛下を御待ちしていた。陛下はすぐそこまで来られた。遺族会長が未亡人を紹介した。陛下はじっと未亡人に御眼をそそがれ、「その後変わりはありませんか」と御声をかけられた。未亡人は「はい」とお答えしたが、たまらずハンカチで顔を覆って肩を震わせ咽び泣いた。陛下は更に、「随分辛いでしょうね。辛抱して下さいよ。御身体を大切にして下さい。そして遺児を立派に育てて下さいね」と、ねんごろな御言葉を賜ったのであった。

日田で鞆飼と提灯行列

6 月 9 日は県北を御巡幸すべく、先ず中津に向かって出発された。途中、杵築では二万人、宇佐では三万人、柳ヶ浦で二万人の奏迎を受けられ、11 時半中津駅御着。三機中津工場、小幡図書館を御視察。御昼食後、中津公園広場の市民奏迎場で三万人の市民の赤誠に応えられ、伏木原開拓地を経て、日田市に入られた。御巡路は山深い村々ではあるが、どこまでも旗の波が続き、紋付羽織袴で端座して奏迎する人、麦刈りの姿のままで手を振る農夫等さまざまであった。陛下はたった一人でも奏迎者の姿が御眼に止まると、わざわざ御車

を徐行させ、帽子を脱がれて御会釈された。日田市は日田盆地の中心で、山紫水明の水郷である。広瀬淡窓の咸宜園跡で説明を聞かれ、奏迎場で三万人の奏迎を受け、御泊所の竹内八三郎邸に入られた。御泊所の前には清流が流れている。この日は十三夜の月夜でもあった。岸には提灯を振り万歳を叫ぶ人の波である。陛下は御居間の電灯を消され、日の丸の提灯を持たれてこれを御降りになる。その度毎に万歳の声が起る。やがて上流から篝火をたきながら二隻の鵜飼船が下ってきて、十四羽の鵜が水に潜っては頭を上げる。日田名物の鵜飼で、九州路最後の夜を御慰め申し上げようとする民の至情である。対岸には延々と提灯行列が続く。陛下はいつまでも提灯を振られる。かくして日田の夜は更けていったのである。6月10日朝、イカダ流しを御覧になり、御泊所を御出発、玖珠郡に入られた。ここは九州の尾根と言われる山岳重畳たる地である。途中、北山田村で椎茸の栽培場を御覧になり、森町の玖珠郡奏迎場で一万数千名の赤誠を受けられ、深耶馬溪の景観を賞でられつつ耶馬溪村の太平橋を渡って福岡県に入られた。築城奏迎場で同地方の赤誠を受けられ、行橋から列車で午後6時過ぎ小倉駅御着、御泊所である八幡市の日鉄高見倶楽部にお入りになった。6月11日、陛下は午前8時半、知事ら多数の御見送りを受けられて小倉駅御発、午後9時5分、京都駅御着。同夜は大宮御所に御一泊。翌12日午前9時過ぎ京都駅御発、午後7時過ぎ東京駅御着。5月17日、九州御巡幸に出られてから実に27日ぶりで皇居へ御還幸になられた。

九州路奏迎者七百万人

九州御巡幸は行程二千余キロ、お立寄りになられた個所は約190か所にもものぼる。最も過密な日は一日に15か所という日もあられた。そして、御会釈の為一日に五千回も帽子を取ったり、かぶったりされた。この間に国会から法律の御署名や、内閣の遣いが五、六回来て深夜まで公務をされたが、終始お元気で、毎日入浴されてお疲れを癒され、御運動が烈しいのか御食事もすすみ、特に郷土食を喜ばれた。各県とも六割から七割の県民が奏迎したので、約七百人の民草に御会いになられたことになる。文字通り九州路は日の丸に埋め尽くされたのであった。この九州御巡幸では、佐賀県の目達原開拓地、長崎県の大村入植地、熊本県の隈庄開拓地、鹿児島県の野井倉開墾地、宮崎県の広瀬原開拓地、大分県の伏木原開拓地に御成りになったが、「熊本県開拓地」と題されて次の御製三首を賜った。

かくのごと荒野が原に鍬（すき）をとる引揚びとをわれはわすれじ

外国（とつくに）につらさしのびて帰りこし人をむかへむまごころをもて

国民（くにたみ）とともにこころをいためつつ帰りこぬ人をただ待ちに待つ